

国宝 金峯山寺二王門

保存修理工事の概要



修理前二王門正面（※仁王像搬出後）

文化財名称 金峯山寺二王門 1棟 附 風鐸 1個（康正二丙子九月日）

文化財指定	明治 39 年 (1906) 4 月 14 日 特別保護建造物（内務省告示 38 号） 昭和 28 年 (1953) 11 月 14 日 国宝	事業費	2,000,000,000 円（当初計画） 国庫補助事業（他に奈良県・吉野町からの随伴補助を得て実施）
建立年代	こうしょう 康正 2 年（1456）（別途保管する風鐸の銘による） ふうたく	修理方針	解体修理
構造形式	さんげんいっごにじゅうもん いりもや ほんかわら 三間一戸二重門 入母屋造 本瓦葺	所有者	金峯山修験本宗 総本山 金峯山寺
		所在地	奈良県吉野郡吉野町吉野山

主要寸法	棟 高	20.230 m	桁 行 初重	13.387 m	軒 出 初重	4.431 m
	平面積	108.381 ㎡	二重	11.369 m	二重	4.060 m
	軒面積	722.173 ㎡	梁 間 初重	8.096 m	軒 高 初重	7.030 m
	屋根面積	757.306 ㎡	二重	6.151 m	二重	13.105 m

発行	〒639-3115 奈良県吉野郡吉野町 吉野山 2548-2 文化財保存事務所 （金峯山寺出張所）	吉野山ふるさとセンター内 TEL:0746-34-5020
----	---	----------------------------------



▲北東方から撮影した金峯山寺全景

しゅげんどう きんぷせんじ
修験道の根本道場 金峯山寺

寺伝によれば、金峯山寺は役行者が感得した金剛蔵王大権現を祀ったのにはじまったとされ、修験道の根本道場として吉野山に千余年の法灯を伝えています。創建およびその後の経過は明らかではありませんが、平安時代になると中興の祖理源大師聖室により境内が整備され、皇族・貴族の参詣が相次いで行われました。しかし、鎌倉時代末期以降、度重なる戦火に見舞われ、蔵王堂をはじめ他の建造物は、焼失と再建を繰り返してきました。

金峯山寺二王門について



にじゅうもん
二重門

金峯山寺二王門
(国宝)



ろうもん
楼門

當麻寺仁王門
(奈良県指定文化財)

室町時代以前建立の二重門

◀法隆寺中門 奈良県生駒郡斑鳩町	あすか (飛鳥時代) 593-710
▶東大寺南大門 奈良県奈良市	しょうじ (正治元年) 1199
▼光明寺二王門 京都府綾部市	ほうじ (宝治2年) 1248

金峯山寺二王門は、吉野郡最古の建造物で、「二重門」という形式の門です。「二重門」とは、二層構造で、初重・二重それぞれに屋根が設けられた形式の門を指します。類似形式の門としては「楼門」があり、同様に二層構造ですが、屋根が上部にしか設けられていません。室町時代以前に建立された二重門は数例しかないので、金峯山寺二王門は貴重な例とされています。また、使用されていた瓦や木材などには、複数の紀年銘(※)があり、度重なる修理の記録が残されています。このことにより、二王門は定期的に修理が行われ、多くの人々の努力により、現在まで維持されてきたことが窺えます。

※紀年銘＝建立年号など、年代を示す文言が入れられた銘のこと。

建立年代についての考察

二王門の建立時期については、保管されている風鐸の銘から、康正2年(1456)とするのが通説ですが、これは正平3年(1348)の戦火で吉野山が全焼し、この時二王門も焼失したという考えに基づきます。しかし、ここで不可解なことは、門内に安置されている仁王像は、胎内銘から延元3-4年(1338-39)の造立であることが確認されていることから、正平3年の戦火を免れたということです。延元から康正まで約120年ありますが、仁王像に雨や雪などに曝された形跡がほとんどないことから、二王門も正平の戦火を免れたことが考えられ、再考の余地があります。一方、二王門の初重と二重で細部意匠の違いが指摘されており、これらを考えて、二王門は当初単層の門だったのが、康正年間頃に二重門に改築されたという説もあります。今回の保存修理工事を機に、この問題についても明らかにできればと考えています。



かしらめき きばな
▲頭貫 木鼻 (二重)



かしらめき きばな
▲頭貫 木鼻 (初重)

奉造立 一 三方土像
器説治印大和尚位正久
学頭権大僧都宗通
学頭権少僧都長勝
大佛師法橋上人位康成
小佛師康舜
良園園誠

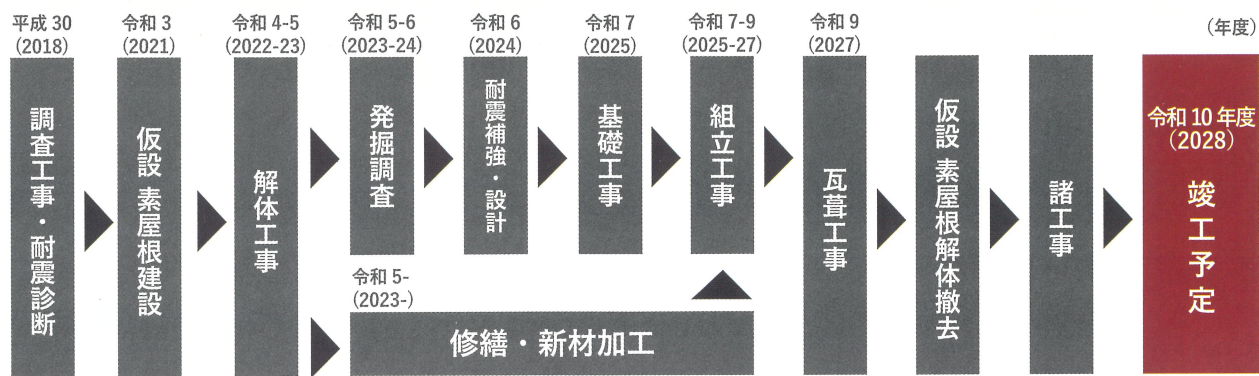
延元二年 乙 十月廿五日

金峯山二王造立事
證誠法印大和尚位正久
学頭権少僧都法眼和尚位長勝
学頭権少僧都法眼和尚位宗通
大勅進聖人大園
大施主多田兵庫頭入道宗貞
大佛師法橋上人位康成
小佛師 康舜
幸禪 良園
大工清原國弘

延元三年 庚戌十二月十九日

▲仁王像胎内銘 左:吽形像背面(延元4年(1339)) 右:阿形像背面(延元3年(1338))
「金峯山寺二王像内品民俗資料緊急調査報告書」より

工事の流れ



今回の保存修理工事は、奈良県文化財保存事務所が金峯山寺より委託を受け、令和 2 年 9 月に本体工事に着手し、令和 10 年度の竣工を目指しています。修理の方針は、建物一度すべて解体し、^{ふどうちんか}不同沈下(※)を直すため、基礎の見直しを行った上で再度組み立てを実施します。この手法を「解体修理」と言います。

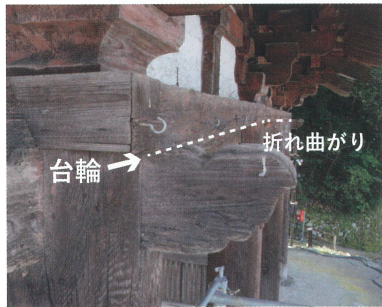
二王門の建つ敷地は、史跡・名勝「吉野山」に含まれるので、基礎の施工に先立ち、発掘調査を実施します。解体に際しては、技法調査、改変・復原調査を行い、二王門の建立時の姿とその後の履歴の解明も目指しています。虫害や腐朽により破損が大きい部材などは取替えや修繕を行います。また、耐震性能についても、専門家による構造調査と診断を実施し、耐震補強を実施する方針で進めています。調査内容の精査や修理方法の選定にあたり、各分野の専門家で作成される専門委員会の意見を伺いながら進めており、工事終了後には実施内容や調査結果をまとめた修理工事報告書を刊行します。

※不同沈下＝地盤が一樣でないために、建築物などが傾いて沈むこと。

破 損 状 況

基 礎

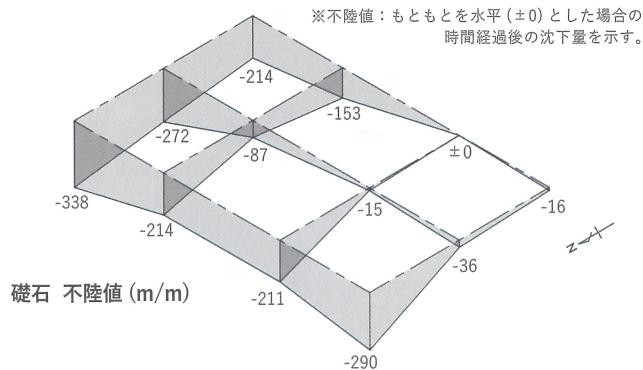
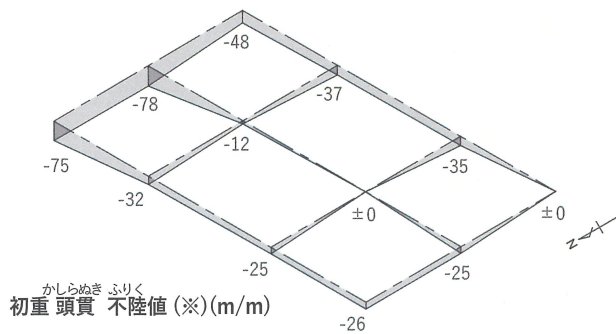
昭和 18-25 年 (1943-50) に実施された保存修理以降も、進行性のある不同沈下がみられ、特に建物東側で大きく沈んでいました。また、柱を支える礎石のいくつかで割れが生じ、基壇面で陥没している箇所もみられました。この影響により、一部の水平部材は東方で折れ曲がっていました。



▲基礎の不同沈下による水平部材の変形



▲基壇の割れ・基礎の沈下

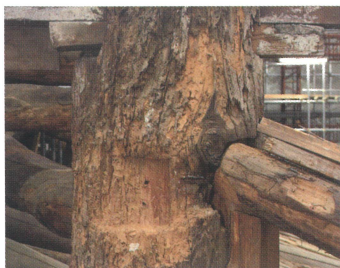


木 部

全体的に損傷が激しく、特に松材を使用している箇所では、看過できない虫害が多くみられました。その他にも組物などでは変形、亀裂が生じているものもありました。



▲亀裂が生じた部材 (初重 尾垂木)



▲虫害を受けた柱 (二重 柱)

屋 根

屋根瓦は凍害などの影響で割れが生じ、破損した瓦が道路上へ落下してしまっていました。また、箱棟は全面に苔などが繁茂し、腐朽が進行していました。



▲箱棟の腐朽



▲瓦の凍害

関連年表

金峯山寺全体

本堂(蔵王堂)

二王門

南北朝

南朝 北朝

元弘 2年 / 正慶 元年 (1332)

護良親王 吉野にて挙兵

元弘 3年 / 正慶 2年 (1333)

鎌倉幕府軍により 吉野山全焼
(蔵王堂・二王門焼失か)

延元 元年 / 建武 3年 (1336)

後醍醐天皇 吉野を皇居とする

延元 4年 / 暦応 2年 (1339)

仁王像 造立
(二王門建立か)

正平 3年 / 貞和 4年 (1348)

高師直軍により 吉野山全焼か
(二王門・蔵王堂焼失か)

康正 元年 (1455)

蔵王堂 再建

康正 2年 (1456)

二王門 再建 仁王像 彩色
(改築か)

天正 14年 (1586)

蔵王堂・大塔などが焼失

天正 19年 (1591)

蔵王堂 再建

文禄 3年 (1594)

豊臣秀吉 諸将をひきつれて
吉野で花見を催す

寛文 7-9年 (1667-69)

二王門 修理

寛文 9年 (1669)

蔵王堂 修理

寛保 元-2年 (1741-42)

二王門 修理
(瓦銘による)

安政 6年 (1859)

二王門 修理
(瓦銘による)

文久 2年 (1862)

二王門 修理

大正 13年 (1924)

蔵王堂 解体修理

昭和 9年 (1934)

二王門 西妻の軒先が
倒木により大破

昭和 18-25年 (1943-50)

二王門 解体修理か

昭和 45年 (1970)

二王門 部分修理

平成年間 (1989-2019)

部分修理・災害修理等
屋根修理・防虫処理・壁修理など
計4回ほど実施

平成30年-令和11年(2018-28)

二王門 解体修理工事
(先行調査工事を含む)

▲重要文化財 木造金剛力士立像(仁王像)

左:吽形像 右:阿形像

金峯山寺二王門の仁王像は、桧や杉の寄木造りで、文化財に指定されている仁王像の中では、東大寺南大門の像に次いで2番目に大きく、高さ5m に達します。胎内銘から南都大仏師康成らによって造られたことがわかっており、この他にも、康正2年(1456)に彩色が施されたことも記録されています。二王門の修理期間、奈良国立博物館にて特別公開中です。



▲蔵王堂で保管されている二王門風鐸(康正銘)

別途保管されている風鐸には「金峯山寺/二王堂/康正二丙子九月日/大勸進定善」、風鐸の舌には、「金峯山寺二王堂/大勸進定善/大工下田住助次郎/康正二年丙子九月廿日」と刻まれており、この銘により、文化財の指定時には康正2年(1456)の建立とされています。



▲大棟 鬼瓦(西方)と鬼瓦にみられる銘

左:修理前の状態 右:本体左側面の銘(寛保銘)

二王門大棟の鬼瓦本体には、東西共に寛保元年の銘が刻まれており、西方の本体左側面には、「寛保元年/八月吉祥日」と刻まれています。また、鬼瓦右側ヒレ部分には、「安政六年/己未十月吉日/藤原家次/瓦師/川原屋村住/野木勘兵衛」と刻まれています。

室町

安土桃山

江戸

明治・大正・昭和

平成・令和